現代史講座　⑧

ポーツマス講和会議と小村寿太郎

平成20年3月1日　高根台公民館

日露戦争と太平洋戦争では、いったい何が違っていたのか ― 私は、一番大きかったのは、リーダーたちの現実認識だったと思うのです。日露戦争のリーダーは、元老や政府首脳はもとより、陸海軍の首脳部にしても、世界の中の日本の弱い立場、日本の国力の実情をよく知っていました。そしてそれを補うため、情報を大切にし、見事なくらいに適所に適材を当てました。それがロシアという超大国を相手にして、どうにか勝つことが出来た最大の要因だった、と言ってもいいでしょう。完璧な勝利と言えるのは日本海海戦くらいのもので、後は旅順にしても奉天の戦いにしても際どい勝利の連続、まさに九死に一生の戦いでした。中でも際どかったのが、これからお話する日露講和会議の交渉です。一歩誤れば、それこそ、それまでの勝利は全て吹き飛んでしまうところだったのです。

一年半にわたった日露戦争に決着をつける講和会議は、明治三十八年八月十日から始まりました。舞台はアメリカ東海岸、ニューハンプシャー州の小さな港町ポーツマスです。主役は、日本が外務大臣の小村寿太郎、ロシアは長年大蔵大臣を務めたウイッテでしたが、二人には大変重い足枷のついた交渉でした。日本は国力の限界に近付いていて、これ以上戦争を続ける力がありません。ロシアも革命の火の手が、あちこちにくすぶっていました。お互い何とか講和を纏めたい気持ちは同じなのですが、そこは外交交渉ですから弱みは見せられません。しかも小村にとっては、講和の結果が形の上で日本の判定勝ちになるように、つまり土地なり賠償金なりが少しでもいいからほしい。ところがウイッテには、「土地も金も一切ダメだ」というロシア皇帝の厳しい命令があったのです。

二十日間にわたった交渉は何度か行き詰まり、決裂寸前にまで行きました。それが何とか纏ったのは、仲裁役であるアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトの存在が大きかったのです。ルーズベルトはこの調停でノーベル平和賞を受けましたが、その粘り強い斡旋がなければ、講和会議は開くことさえ難しかったでしょう。そしてもう一つ、見落としてならないのは、三十六年後の日米開戦につながる対立の火種が、実はこの時からすでにくすぶり出していたことです。

日露両国全権団の顔合わせは、ニューヨーク沖の大統領専用ヨット「メイフラワー号」で行なわれましたが、ルーズベルトは小村の手を握ると、「ここにいるのは同志だけですから」と言ったそうです。ロシア全権団が乗船してくる前に、わざわざ「貴方の味方ですよ」。こう声をかけたほど、ルーズベルトは親日的でした

し、影になり日向になって日本を助けてくれたのです。このルーズベルトの日本贔屓には、先月「明治の言論」でも話しましたように、新渡部稲造の書いた「武士道」という本が大きかったと言われます。新渡部は内村鑑三と一緒に札幌農学校で学んだクリスチャンですが、一高校長や東京女子大の学長を務めた教育者であり、国際連盟の事務局次長をした国際人でもあります。「日本の魂」というサブタイトルのついたこの本は、明治三十二年フィラデルフィアで英文で出版されましたが、武士道の根本は恥を知る、名誉を守る点にあると説いています。この本を読んで感動したルーズベルトは、六十冊も買い入れて陸軍士官学校に寄贈し、日本理解の教科書として使わせたそうですが、日清戦争に勝って世界に注目されるようになった日本を、広く欧米諸国に理解させるのに役立った本でした。

その新渡部は、事あるごとに寛大さ、謙虚さ、心の触れ合いの大切さを説いています。「専門センスではいかんよ。カモンセンス、常識的でなくては」――これが口癖だったそうです。一高の校長になった時、学生たちに「ソシアリティ、社交的観念がなくてはダメだ」とも話しています。どんなに知識に優れ、徳があっても、それだけでは個としての人間しか出来ない。実社会に通用し、円満な活動の出来る人間にならなければ、価値はないと言うのです。

実は、ポーツマスの小村を調べていて、この新渡部の言葉が痛いほど私の胸に迫ってくるのです。確かに小村は、明治の外交史では一際群を抜く存在でした。日露関係が緊迫した時、イギリスとロシアでどっちが国として信用出来るか、日本の安全にはどっちと組んだ方がいいのか。冷静な判断で日英同盟を結んだように、外交の感覚、見通しにも優れていました。日本の外交に「主義・原則の外交」を確立した人でもあります。維新の元勲でもなく、総理大臣も経験しないで、一代で侯爵にまで登りつめたのは小村だけです。日露戦争で武勲を立てた連合艦隊司令長官の東郷平八郎、海軍大臣の山本権兵衛、満州軍総参謀長の児玉源太郎、旅順を攻略した乃木希典と、いずれも伯爵どまりだったことを考えれば、小村の外交手腕がいかに高く評価されていたかが分かります。しかし、外交官としての専門センスには優れていても、カモンセンス、常識の点ではどうだったのでしょうか。ポーツマスでのウイッテが、本来の貴族趣味をかなぐり捨て、極めて明るく庶民的に振る舞ったのに対し、小村は脇目も振らず、冷徹なほど外交一筋でした。社交的観念を軽視する、むしろ無視したようにさえ思えるところが随所に見られました。それはアメリカが「世論の国」であることを考えると、やはり小村の大きなミスだったと思うのです。

その点、常識でも社交的観念の点でも、抜群だったのが元老の伊藤博文です。しかも伊藤は、何か問題が起これば必ず動いた人です。ルーズベルトを講和の仲介役に引っ張り出したのも、伊藤の優れたリーダーシップでした。伊藤は何とか戦争を避けたいと「恐露病」、ロシアを恐がっていると言われながら、最後まで日

露和解の道を探り続けました。しかし一たび御前会議で日露開戦が決まると、貴族院議員の金子堅太郎を呼んでアメリカ行きを命じています。現実主義者の伊藤は、大国ロシアといつまで戦っていたら日本に勝ち目はない。潮時を見て仲裁をしてくれる国が必要だが、それはアメリカを措いて外にない。アメリカ世論を味方につけ、金子とハーバード大学同窓であるルーズベルトに動いて貰おうと、開戦と同時に戦争終結への布石を打ったのです。

伊藤はまた、娘婿の末松謙澄をイギリスへ派遣しています。末松はケンブリッジ大学で八年間も文学、法律を勉強したイギリス通ですが、この戦争は有色人種の日本にとっては、初めて経験する白色人種、それも強国との戦争です。仏教国とキリスト教国との戦争でもあり、宗教戦争になる危険性をはらんでいて、黄禍論の再燃となり全白人国やキリスト教国から敵視される恐れさえあったのです。金子と末松は「英米二国ノ国情ヲ査察シ、其ノ人民ノ同情ヲ喚起シテ以テ戦役ノ後援トスル」。こう指示されたように、黄禍論の再発を防ぐための言論戦、広報活動が任務でした。二人ともあらゆる機会をとらえて、騎士道に通ずる日本の武士道精神を説いて回りました。末松は日本のことを「旭日」、「日本の面影」の二冊の英文の本で紹介しましたし、金子もエール大学の教授に委嘱して日本のロシアに対する講和条件のシンポジウムを開いて貰うなど、英米の世論を親日的に導びくのに貢献したのです。この戦争の隠れた功績者だと言ってもいいでしょう。

私が明治のリーダーが見事だったと思うのは、それが伊藤だけではなく、全員の共通認識だったことです。彼らは、戦争が長期化したり拡大したりすれば、結局のところ国力のない日本が敗れることを知っていました。ですから、戦闘区域は北進してもせいぜいハルビンまで、戦争期間も長くても一年余りと、限定戦争の考えで一致していました。そしてその構想に基づいて、素早く行動を起こしたのです。元老の井上馨と松方正義は、日本の貧しい財政を考えれば、外債を募集して戦費を調達する以外に道はないと、日銀副総裁の高橋是清を欧米へ派遣しました。大山巌は満州軍総司令官として出征する際、薩摩の後輩、海軍大臣の山本権兵衛に「軍配をあげる大役が勤まるのは、おはんを措いて他にない」と、戦争終結の時期を誤るなと頼んでいます。伊藤はまた、「世論の国アメリカ」の持つ特質も見抜いていました。「自分が懸念しているのは、アメリカは世論の力が強大だから、ひとたび世論が動くと、どんなに政府が日本に同情を寄せていても、止むを得ず世論に迎合する政策を取ろうとすることだ」。大変鋭い観察です。事実日本とアメリカの関係はそうなっていくのですが、それだけに、伊藤がポーツマスへ行っていたら…。この思いが一層強くなるのです。

では、講和会議の首席全権はなぜ伊藤ではなく、小村だったのでしょうか。伊藤は「伊藤の初物食い」と言われたくらい、重要なポストには必ず最初に就任した人です。内閣総理大臣、宮内大臣、枢密院議長、貴族院議長に韓国統監と、みん

な初代がつきます。この間、政友会を創設して初代総裁にもなっています。長州といっても足軽という極めて低い身分の出で、潜在意識に劣等感がある。それが伊藤の旺盛な名誉欲を掻き立てたのだ。そんな見方もありますが、明治天皇は何か難しい問題が起こると、必ず「伊藤に確かめたか」と聞かれたほど、伊藤を信頼されていました。それだけに最初の難題には「乃公出でずんば」、自分が出て行かねばの自負心が強かったのでしょう。講和会議の首席全権は日清戦争で下関講和条約を纏め、経験済みでした。

講和会議の開催が決まると、桂太郎首相は元老、閣僚を集めて、全権を誰にするか相談しました。桂の腹は、首席全権伊藤、補佐として外相の小村です。ところが全員賛成なのに、肝心の伊藤だけが首を縦に振りません。「播いたものは刈らざるべからずだ」と言うのです。「日清戦争の時は、わしが首相だったから、わしが収拾した。今度は首相である桂自身が局に当たるのが順序というものだ」。桂には、長州の大先輩である伊藤の拒絶をはね返すだけの力はありません。さりとて、首相と外相が一緒に日本を空けるわけにもいかず、結局首席全権小村、補佐として駐米公使の高平小五郎に決まったのです。

伊藤には、土佐出身の貴族院議員谷干城からも「全権を引き受けるな」と忠告の手紙が来ていました。「貴方がおだてられ行けば、貴方が槍玉に上がるだろう。今度は日清戦争の時とは大違いで、平和になっても内地の惨憺たる状況は火を見るより明らかだ。この度の談判は誰が行っても妙案がない。桂、小村にて沢山である。徒に馬鹿者の怨みを買うのは愚の至りだ」。こう言うのですが、谷は明治十年の西南戦争で熊本籠城戦の指揮をとった軍人出身の政治家で、戦局と戦後の推移をよく見通していました。伊藤も先の見えることでは人後に落ちません。旅順を落として奉天を占領し、日本海海戦に勝利したとはいっても、日本にこれ以上戦う力がないことは分かっていました。となれば、講和交渉の落とし所も大体見当がつきます。損な役回りを買って出ることはないと、思ったのでしょう。

それでは、その頃の日本の国力の実情は、いったいどんなものだったのでしょうか。参謀総長の山県有朋は奉天の戦いが終わると、明治三十八年三月二十三日のことですが、桂首相と小村外相に意見書を出しています。「政戦両略概論」、つまり政略と戦略の一致を訴えたこの意見書が、深刻な戦力不足の実情を何よりも端的に物語っているのです。まず第一に、ロシアはまだ本国に強大な兵力を残しているのに、日本はあらん限りの力を使い果たしている。十三の師団は全て全線に出払っていて、国内には正規の予備兵力は全くありません。開戦以来の出血の多さは、陸軍の予測をはるかに上回るものでした。三十七年六月の南山の戦いで「死傷者四千」の報告を受けた大本営が、「数字が一桁違うのじゃないか」と問い合せたほどです。しかし、やがてそれがどの戦場でもそうだとわかると、九月に徴兵令を改正して大がかりな兵隊集めにかかったのです。陸軍の兵役は現役三年、

予備役四年四か月で、ここまでが戦争になった時の戦闘要員ですが、とても足りません。五年でお役御免になる後備役を十年に延長して、三十八歳の老兵まで動員しました。後備兵は本来なら、占領地警備とか補給といった軽い任務に充てるのですが、戦闘が激しくなれば、そんなことを言っている余裕はありません。次々と第一線に投入されたのです。

「機密日露戦史」という本があります。支那事変の南京虐殺事件の責任を問われ、戦後の現地裁判で死刑になった谷寿夫中将が陸軍大学校の教官時代、学生に講義した講義録を戦後になって出版したものですが、陸軍の機密資料ふんだんを使い、関係者の生々しい証言を集めて、日露戦争の実態がよく分かる本です。「機密日露戦史」には、「後備旅団全く用をなさず」といった報告が随所に記録されています。徴兵検査の合格基準も、奉天の戦いの後、ぐんと下げられました。五尺二寸以上だった戦闘要員は五尺以上に、兵種によっては四尺九寸、一㍍四十八㌢あれば合格です。新聞には「寸足らずの兵隊さん」、戦力低下の核心をついた見出しが出ましたが、戦局は老兵だけでなく、こんな体格の劣った兵隊を掻き集めるところまで来ていたのです。

日露戦争で戦地に動員した陸軍兵力は九十五万人です。兵役年齢に該当する男子四百万人のうち、実に四分の一が戦場へ行ったことになりますが、働き手の中心ですから経済に与える影響も深刻でした。海軍少将瓜生外吉の夫人繁子、この人は明治四年、大山巌夫人となる山川捨松、現在の津田塾大学を開いた津田梅子と一緒に八歳でアメリカへ渡った女子留学生五人の一人ですが、親しいアメリカの友人にこんな手紙を書いています。「今日は働き手を戦争に取られた家族を十七軒、歩いて訪問してきました。老いも若きも、お金持ちも貧しい人も皆二日間の通告で召集されていきます。私の兄の会社の三井物産では、五十人もの番頭達が、銃を持つために戦争にとられていきました」。兄さんの益田孝は三井物産の社長で、彼女は下谷区の出征家族を慰問しては相談に乗っていたのですが、「この区だけでも五百六十四人が召集されました。貧しい人達の悲惨な生活を見て帰ってくると、気分がとても落ちこんでしまいます。留守家族は皆働きたがっているのですが、仕事が思うようにないのです」。この日本内地の生活を生々しく伝えた手紙は、ニューヘブンの地元新聞に紹介されて大きな反響を呼び、五ドル、十ドルの義援金や、心の籠もった慰問品がたくさん送られてきたそうです。

山県意見書は、第二に将校の不足を訴え、簡単には補充できないことを挙げています。ある意味では、兵隊以上に深刻でした。いくら兵隊がいても、指揮官がいないことには烏合の衆と同じです。開戦後半年も経たないうちに、戦地勤務の歩兵将校千二百六十人の二割、二百六十三人が戦死し、それも突撃の先頭に立つ中隊長、小隊長クラス、大尉以下の下級将校に犠牲が集中したのです。陸軍は慌てて士官学校の募集人員を三百一人に増やしましたが、受験生の成績は極めて不

良。合格基準を下げても、二百五十人合格させるのがやっとでした。合格すれば戦場へ行くことが分かっているので、普段なら集まる成績優秀者が敬遠したのです。ところが旅順の第一回総攻撃で、将校の犠牲が多いのにびっくりした陸軍省は、質よりはとにかく数だと、いったんは不合格にした者も合格とし、九月にはさらに四百人を追加募集しました。戦後のマニラの戦犯裁判で死刑になった山下奉文、終戦の時に自決した陸軍大臣の阿南惟幾など、五人の大将を出した陸士十八期生です。もっとも山下も阿南も幼年学校からの進級組で、この試験成績不良組ではありませんでしたが…。陸士の生徒を繰り上げ卒業させても補充が追い付かず、中学以上の学歴があれば予備役少尉にする。この特例措置で、どうにか千七百八十九人の将校を作りましたが、このまま戦争が続けば、軍隊の組織維持さえ難しくなっていたのです。

余談になりますが、実は陸軍を苦しめたものにもう一つ、当時の国民病脚気がありました。日露戦争では戦闘で六万人、病気で二万四千人が死んでいますが、病死者の半数以上は脚気なのです。何しろ毎月一万人が脚気で入院し、延べ十一万人が戦力にならなかったというのですから深刻でした。陸軍の兵隊の主食は、一日白米六合です。銀飯が何よりのご馳走の時代ですから、麦を混ぜたりすればケチっているようで士気に関わる。それにお米は二年続きの豊作で、軍馬に食べさせる麦の確保の方が大変でした。武器、弾薬、食糧を運ぶため十七万頭の軍馬を動員しましたが、一頭あたり一日五升の麦の必要だったといいますから、麦は何をおいても補給の生命線である軍馬に回したのです。

ところが白米主義で戦ってきた陸軍も、思いがけないことから麦飯採用に踏み切ることになります。兵隊たちは寒い満州で戦うため、焼いたお握りを懐で温めながら戦場へ向かいましたが、氷点下二十度を超す寒さにカチカチに凍ってしまい、二、三十分も煮ないと食べられません。戦場でそんなことをしている余裕はありませんから、パンを噛りながら戦う部隊が出てきたのですが、脚気が出なくなったのです。しかも麦飯を採用している海軍からは患者は出ていません。前線からの強い要請で、陸軍も奉天の戦いの後、やっと麦飯に切り替えたのですが、患者は見る見る減っていったそうです。今でこそ脚気は、ビタミンB1の不足による栄養失調だと誰もが知っていますが、コッホが結核菌、コレラ菌を発見し、ドイツ医学、細菌学全盛の頃です。ドイツに学んだ陸軍の軍医も、東京帝国大学の医学部も、脚気は細菌による感染だと思い込んでいたのです。空気の流れをよくするため、兵舎の改築を奨励したというんですから、見当違いもいいところでした。

脚気被害は、もともとは海軍の方が深刻でした。毎年水兵の四割近くが脚気になり、明治十六年には遠洋航海に出た軍艦竜驤で患者百六十九人、死者二十三人を出しています。戦争になって、こんなに脚気が出たんではとても戦えません。

この脚気の原因を衣食住の生活環境から調べたのが、イギリス留学帰りの軍医高木兼寛です。現在の慈恵医科大学の創立者ですが、欧米には脚気はありません。遠洋航海に出た軍艦も、外国の港に停泊している時は脚気が出ないのに、港を出たとたん患者が急増しています。ここに注目した高木は、食べ物、蛋白質不足に原因があるに違いないと、パン食への切り替えを主張したのですが、食費が三倍もかかること、何よりもご飯に馴染んでいることもあって、猛烈な反対が出ました。そこで高木は、軍艦筑波が遠洋航海へ出た時、竜驤と全く同じコースを取らせて、一種の人体実験をしたのです。白米をやめて、蛋白質の多い食糧を満載した筑波からは、十人ほどの軽症患者が出ただけで死者は一人も出ませんでした。

高木は、こうして実証医学で海軍に麦飯を採用させたのですが、陸軍の軍医は見向きもしません。日清戦争で戦闘で戦死したのは千人足らずなのに、脚気では四倍の四千人も死んでいますが、高木の主張は「根拠のない妄説だ」と言うのです。こんなところにもドイツ医学とイギリス医学の対立があったわけですが、軍医の猛烈な反対を押し切って麦飯に切り替えさせたのは、陸軍大臣寺内正毅の鶴の一声だったと言われます。寺内自身、脚気に苦しみ、日頃から麦飯を食べていて効果のほどを知っていたんですが、高木の主張が学問的に証明されるには、鈴木梅太郎が明治四十三年、米糠からビタミンＢ１につながるオリザニンの抽出に成功するまで待たなければなりませんでした。

山県意見書に話を戻しますと、山県は兵力の実情を率直に指摘した上で、今後攻勢をとるためには、奉天からハルビンまで鉄道を複線で敷設し、兵力増強の必要性を強調していました。現在でも兵力が足らないというのに、そんなことは出来っこありませんから、山県意見書が言わんとしていることは、取りも直さず、「軍事的勝利はこれ以上望めないから、日本が有利なうちに講和交渉を急げ」ということだったのです。三月二十八日、表向きは戦況報告で帰京した満州軍総参謀長の児玉源太郎は、新橋駅まで出迎えた参謀次長の長岡外史少将の顔を見るなり、いきなり怒鳴り付けたといいます。「何をぼやぼやしている。火を点けたら消すことが肝心なのを知らんか」。「機密日露戦史」には、「児玉総参謀長が今や戦局収拾の秋なりと説けるは、公然の秘密にして、亦公然の公然」とあります。児玉は、公然の公然といわれるくらい大っぴらに、戦争終結へ向けて元老や政府首脳の尻を叩いて回ったのです。

四月八日の閣議で、まず今後の作戦と外交方針が決まりました。作戦面では現在の地位を守り、外交面では迅速かつ満足な平和を実現するため努力することです。そして二十一日、どんな条件で講和へ持って行くのか、具体的な講和条件の大綱が初めて閣議決定されたのです。「絶対的必要条件」は、韓国を日本の自由処分に委せる、一定期限内の日露両軍の満州撤兵、遼東半島の租借権とハルビン―旅順間の東清鉄道を日本に譲渡する、この三項目です。「出来るだけ貫徹を図る

条件」としては、戦争費用の賠償、樺太の譲渡など四項目を挙げています。これがポーツマスの講和交渉で、日本側要求の出発点になるのですが、この時すでに賠償金や樺太は簡単には取れないだろうと、努力目標に落としていたわけです。

それにしても感心するのは、明治の軍人のしっかりした現実認識です。政治、外交に対する見事な見識は、太平洋戦争の軍首脳部、日本の国力、戦力に真剣な検討もせずに、希望的観測だけで戦争に突っ走ってしまった指導層に比べると段違いです。彼らは今でいう学歴こそありませんが、幕末から戊辰戦争にかけて白刃の下をくぐり、西南戦争、日清戦争では指導的地位にあって、戦争というものを肌で知っていました。大局を誤らない戦略眼、指導力を身につけていました。そしてもう一つ、負けた経験を持っていたこと、私はこれが大きかったと思うのです。明治維新は薩長という勝者、徳川という敗者を生みましたが、その勝った薩長も外国との戦いでは負けています。薩摩は薩英戦争で鹿児島がイギリス東洋艦隊の砲撃により火の海になりましたし、長州も下関戦争、イギリスなど四国連合艦隊の砲撃に敗れています。彼らは精神力だけでは勝てないことを、肌身で知っていたのです。

こうして日本の講和方針は決まりましたが、「講和を求めるのは負けた方だ」。この認識がありますから、日本の方から簡単に言い出すわけにはいきません。頼みはルーズベルト大統領です。伊藤が開戦直後、金子堅太郎を渡米させた真意もここにありましたし、ルーズベルトも開戦四か月後には金子に「講和仲介」の意思があることを伝えていました。しかしルーズベルトは、好意だけで敢えて火中の栗を拾おうとしたわけではないのです。「門戸開放」という言葉があります。中国の領土保全を謳った、アメリカ外交の「錦のみ旗」となるものですが、もともとはアジア進出に遅れをとったアメリカが、先に出ている国々に対して中国での通商の機会均等を求めた、平たくいえば「お前たち、好き勝手にするな。俺も仲間に入れろ」というものなのです。ところがロシアは満州を占領して、これを独占しています。ですから満州の開放を主張して戦争に入った日本とは、アメリカは利害が一致していたわけです。

ルーズベルトは、上院外交委員長のロッジにこんな手紙を書いています。「ロシアの勝利は文明に対する打撃だが、東亜の一国としてのロシアの破滅も均しく不幸であろう。日露相対峙し、互いに牽制して、その行動の緩和を計るというのが最善である」。つまり、日本には勝ってほしいが、日本が勝ち過ぎて強くなり過ぎるのも困る。ロシアが負け過ぎないところで、戦争を終わらせたい。これがルーズベルトの本音であり、そこに満州の門戸開放の条件があると見たわけで、ルーズベルトにとって講和を調停することは、その条件を作り出すことでもあったのです。

ルーズベルトが動いたのは、旅順が陥落し奉天の戦いが迫っている二月八日で

す。フランス大統領を通してロシア皇帝に講和を打診したのですが、答えは「ノー」でした。「満州の決戦はこれからだし、バルチック艦隊が極東へ向かっている。陸と海で日本と勝敗を決する」と言うのです。そして奉天の戦いが日本の勝利に終わると、三月十六日、今度は高平駐米公使を招いて、こう提案しました。「ロシアは、自分の方から講和を求めると、日本に屈辱的な条件を出されるのではと心配している。日本としては、一本逃げ道を作ってやるのが得策と思う。この際日本は、講和の意思があることを列国を通じて伝えてはどうか」。実は、ロシアに金を貸しているヨーロッパの金融資本の間で、ロシアに革命が起これば貸し倒れになるのではないか。こういった心配が出ていましたから、アメリカ駐在のフランス、ドイツ大使が、ルーズベルトに「勝っている日本の方から、講和を申し出るようにしてほしい」と、希望していたのです。

ですから、講和の噂はまずヨーロッパから流れてきましたが、小村の方針は一貫していました。日本から言い出せば、弱みを見せたことになる。かえってロシアのタカ派を刺激し、せっかくの和平の芽を摘んでしまう。日本から言い出すわけにはいかないと、じっと「我慢の子」を決め込んだのです。しかも、小村は周到でした。ただ待っていたわけでなく、ルーズベルトがどんな条件で動いてくれるのか、高平公使を通して電信による交渉を開始したのです。小村はまず「全ての講和条件について、他国の干渉を受けず日露両国政府の直接談判で決定したい」と、日本政府の方針を打診しました。ルーズベルトの答えは、「それは勿論だ」とした上で、「支那分割の恐れを除くため、日本は満州において門戸開放主義を維持し、かつこれを支那に返還することと了解す」。つまり「戦争が終わったら、満州は支那に返せ」。ルーズベルトは「これがアメリカの方針だ」という重大な意思表示を、この時すでにしていたわけです。

しかし、先を急ぐ小村は、「それは言うまでもない」とルーズベルトの主張を認め、「願わくば談判開始の方法を示してほしい」。こう迫って、ルーズベルトから「ワシントンで日露代表者が直接談判してはどうか」との回答を引き出しました。実は、この満州問題こそが、やがて日米対立の火種になっていくのです。日露戦争が米英の経済的支援があって初めて成立し、アメリカに満州の門戸開放を約束してその支持を取り付けた以上、日本は国際道義の上からいっても何をおいてもこの約束は守るべきでした。もし、そうしていたら、人種的偏見や移民問題をめぐる摩擦など、厄介な問題はあったにしても、日米対立の路線はかなり緩和されていたように思います。

ところで小村にとっては、日本海海戦の大勝利こそ、まさに待ちに待ったタイミングだったのです。二日後の五月三十日、高平公使に訓令しました。「日露両国を協議の場につかせるには、第三者の斡旋が必要と考える。日本政府は、その任に大統領が当たられることを望んでいる」。そして「直接且全然其一己ノ発意二

依リ」という意味深長な言葉を使って、大統領の自発的な勧告による講和斡旋を希望したのです。日本の依頼だということは内緒にして、ルーズベルトの自発的な形をとってほしいというのですが、そこには日本の弱みを見せずに交渉を有利に進めたいという小村の計算、同時にそんな形をとらなければならない、日本の苦しさが表われています。

ルーズベルトは、これで「日本は、自分の手の平に乗った」と思ったでしょう。問題は、依然として強硬な態度を取り続けるロシア皇帝ですが、ルーズベルトは巧妙でした。ロシア駐在のアメリカ大使メイヤーに、「皇帝が承諾するなら、そのことは秘密にして、日本からも承諾を取り付ける」と言わせたのです。大国ロシアの面子を考えたこの提案は効果満点、ロシア皇帝も「大統領自身の発意で、日本の同意を得ること」を条件に、勧告受け入れを伝えてきました。「ルーズベルトの調停で講和会議が開かれそうだ」と、六月二日付の紙面でいち早く特報したのは大阪毎日です。ワシントンの特約通信員カール・オラフリンが電報してきたもので、この人は後に国務次官、ルーズベルトの私設秘書も務めた大物記者ですから、講和会議の報道では大阪毎日が断然光を放つことになります。

小村は六月十日、アメリカ政府に正式に受諾回答をすると、直ちに新聞発表しました。「大統領は熱心に日本政府に請うに」という表現で、国民には「講和交渉はアメリカ大統領の勧告によるもので、日本はそれに従ったのだ」と思わせ、同時に気の変わりやすいロシア皇帝が簡単に態度を変えたりしないよう、釘を刺したのです。街には号外の鈴の音が鳴り響き、そこには「露国和を乞う」の大見出しが躍っていました。国民は「ロシアがアメリカに頼んだのだ」と受け取り、「日本勝った、ロシア負けた」と歓喜したのです。

講和会議の開催地については、日本が清国のチーフーかワシントン、ロシアは同盟国フランスのパリかオランダのハーグを希望しましたが、ロシアは「ワシントンでもよい」と折れてきました。結局、真夏で暑いワシントンを避け、軍港になっていて警備や機密保持にも便利なポーツマスとなったのですが、ロシアが、日本に好意的で敵地にも近いアメリカでの開催に同意したのは、全権ウイッテの「世論国家アメリカ」を利用しようとの魂胆が秘められていたのです。

小村ら日本全権団は七月八日、横浜から客船ミネソタ号でアメリカへ向かいました。東京市内の家々には国旗が掲げられ、霞が関の外相官邸から新橋駅までの沿道は見送りの市民の万歳で沸きました。しかし小村の周りには、そんな歓呼の声とは裏腹に悲壮感が漂っていたと言います。外務省随員の政務局長山座円次郎は、小村に「あの万歳が、帰国の時に馬鹿野郎の罵声くらいですめば結構でしょう」と言ったそうです。講和会議の開催が決まると、日本中に勝利の分け前を要求する気分が高まっていました。そしてこれを煽ったのが、開戦前から強硬論をぶっていた東京帝国大学の七博士です。戸水寛人とか小野塚喜平次といった錚々

たる学者が、対露講和問題同志会を結成し、「賠償金三十億円を取れ、樺太、カムチャッカだけでなく沿海州全部を取れ」と、威勢はいいが無茶としか言い様のない決議をしていたのです。

小村に対する政府訓令は、六月三十日の元老を交えた閣議で決定しましたが、講和を成立させるには、ロシアが受諾可能な最低限の条件を要求する以外にないということで、全員が一致しました。ですから、ロシアが応ずる望みがあると考えた「絶対的必要条件」の三項目以外は、小村の裁量に任せることになったのです。この決定は「最高機密事項」として満州軍首脳部にも伝えられましたが、総参謀長の児玉は、「事情の許す限り貫徹に努める」とした条件に「軍費の賠償は最高額を十五億円とし、談判の様子でそれ以内に適当に纏める」。こうあるのを見て「桂の馬鹿が、償金を取る気になっている」と言ったそうです。そんな「ないものねだり」をして、講和をぶち壊すなと言うのです。元老の井上馨が「君は実に気の毒なことになった。今までの名声も、今度で台無しになるかも知れない」と涙を浮かべれば、全権を小村に押しつけた形の伊藤博文も、小村の手を握り締めたまま「君が帰ってくる時には、他人はどうであろうとも、我輩だけは必ず出迎えに行く」と言いました。明治天皇は、小村にしみじみとした口調で「誠にご苦労である」と言われ、「私はいつも小村の傍にいる」と、門出の餞別に愛用の煙草入れを渡されたそうです。誰もが、小村の使命の前途が多難であることを知り尽くしていたのです。

× ×

小村は身長一㍍四十三㌢、当時の日本人としても極端に小柄です。しかも目がくぼみ、肉は落ちて体重四十㌔足らず。しかし「機密日露戦史」は、議会で日露開戦を報告した時の小村をこう書いています。「四肢五体とんど肉なく、全身ただ骨と皮であったが、その厳正な態度、その心魂から発する語気、肺腑よりほとばしる熱誠が、満場の同情を一身に集めた」。小柄な小村には、いつも何か昂然とした感じがありました。ウイッテは一㍍八十㌢の大男でしたが、小村はちっとも小さく感じさせなかったそうです。

清の代理公使時代、せっせと各国公使館を回って情報集めをする小村に「ラット・ミニスター」、「鼠公使」のあだ名がつきました。ある宴会の席で清の宰相李鴻章が「見渡すところ、貴方のような小さな人はいない。日本人は皆そうですか」。見下したように言うと、小村はすかさず「貴方のような大男もいます。だが多くは愚鈍で、日本では大男総身に知恵が回りかねとか、ウドの大木とかいって、国家の大事は託しません」。こう大笑いして、李鴻章の顔色を変えさせたというのです。

明治三十一年にアメリカ公使になった時、ワシントンには日本海海戦で連合艦隊参謀として活躍する秋山真之海軍大尉が留学していました。小村は、秋山にこ

んなことを言っています。「秋山さん、人生には三つの楽しみがあるのをご存じですか。貧しく生まれたというのが、その一つ。日本を愛するというのが、その二つ。日本のために尽くすというのが、その三つです。どうですか、この意見は…」。確かに小村の人生には、日本を愛し、日本に尽くす。それ以外は社交も家庭の安らぎも、全て拒み通した感じさえ、することがあります。そこには、小村が第一に挙げた貧乏生活、そして妻がいて妻のいないような淋しい家庭生活、薩長中心の藩閥政治の外にいて、長いこと日の当たらなかった外交官生活。この三つが、小柄な小村を昂然とした小村に仕立てていったように思います。

小村は、宮崎県の飫肥藩という五万石のちっちゃな藩の出身です。飫肥は宮崎から日南線で一時間ほど南に入った日南市の中心、今も白壁造りの武家屋敷の残る落ち着いた静かな町ですが、小村は記憶力抜群、大変頭のいい子だったそうです。藩校である振徳堂を首席で卒業、十五歳の時に藩から選ばれて長崎で英語を学び、藩の学費援助で東京大学の前身である開成学校に入りました。明治八年、文部省の第一回留学生としてハーバード大学で五年間法律を勉強し、一年遅れて入ってきた金子堅太郎とは同じ部屋に下宿した仲です。その頃の小村が、ハウエルズというアメリカの人気作家が書いた「ハーバード大学参観記」に出てきます。「図書室の一隅には端座して黙読する黒髪青顔の一少年あり、鷹揚、閑雅、高士の風を帯ぶ」。悠々として雅びかで、高潔な人の雰囲気を持っているということでしょうか。飫肥の小村寿太郎記念館には、若い頃の小村の大きな写真が飾ってありますが、鼻筋が通り、目の澄んだ、大変端麗な顔つきの貴公子です。

帰国した小村は司法省に入り、二十七歳で十七歳の町子と結婚しました。当時としては珍しい女学校出で、大変な美人だったそうです。ただ、幼女がそのまま大人になってしまったような女性で、裁縫、料理は一切ダメ。芝居見物が三度のご飯より好きで、家事は全て女中任せでした。そこへ小村の父親が山林製材事業に失敗し、その負債が小村の肩にかかってきたのです。小村は明治十七年外務省に移りましたが、毎晩のように借金取りが押し掛けるので、何日も家に帰ってきません。金もないのに酒と女に溺れ、しかも町子が無類の焼き餅焼きでした。待合に乗り込んで相手をしていた芸者に火鉢を投げ付け、屏風に燃え移る騒ぎもあったといいますが、夫婦仲は冷えて別居同然でした。小村がアメリカ公使になってから死ぬまでの十四年間、家事から家計まで一切の面倒を見たのは、宇野弥太郎という召使です。ワシントン公使館のコックをしている時、質素で清廉潔白、無欲な人柄に惹かれ、荒涼とした家庭生活に同情したと言っています。何しろ公使の小村の持ち物といったら、フロックコート、和服一着ずつに角帯一本、後は歯ブラシと歯磨き一袋、手拭一本だけだったというのです。

「赤貧洗うが如し」と言われた小村の貧乏物語には、それこそ伝説のような話が無数にあります。家財道具は税金滞納で差し押えられ、居間には動かなくなった

柱時計と長火鉢、それに座布団が二枚あるだけ。役所へは、夏も冬も色あせた一張羅のフロックコート。雨が降ってきても傘がないので、山高帽の端から雫を垂らしながら平然と歩いていきます。裏門が近道なのに、わざわざ表玄関へ回って胸を張って登庁しました。昼食の弁当も、付けがたまっていて仕出し屋が持ってきてくれません。食堂で土瓶を抱え込み、お茶ですきっ腹をごまかしました。宴会の会費を払わないので、小村には知らせないことにしていたのに、どこで聞き付けるのか、定刻には必ず現われ、それも上座に座ります。普段は極端に無口なのに、気炎酒というのか、飲むほどに酔うほどに気炎を上げます。小村は筆無精で手紙は余り残っていないのに、沢山持っているという人がいます。それは全部借金の申し訳の手紙だったとか。六百円も溜まった付けの通帳を、家宝にしている仕出し屋があるとか。

小村のことを、「度胸の魂がのし歩いている」と言った人がいたそうです。父親の負債は二千円ほどだったといわれますが、元利に小村の遊興も重なり一万五千円。牛飯一杯一銭、東海道の一流旅館でも一泊二十五銭の時代です。見兼ねた外務次官の青木周蔵が、援助の手を差し伸べようとしたところ、小村は断っています。「高利貸の金は営業の金だ。いくら借りても返済すれば恩義に縛られない。しかし普通の人のは違う。終生頭が上がらなくなる」と言うのです。

結局これを解決したのは、開成学校時代の同級生七人の友情でした。皇太子時代の昭和天皇に倫理を進講した杉浦重剛ら七人が、連帯保証人になって五千円ほどの金を作ると、高利貸を一堂に集め、「これでどうか」と一挙に解決してしまったんだそうです。高利貸も貸し倒れになるよりはと、思ったのでしょう。新しい債務の返済は、七人が毎月十円ずつを拠出、小村も月給百五十円の中から生活費五十円を残して百円を充てたといいますから、苦しい生活はしばらくは続いたわけです。秋山真之が「閣下、借金の返済方法についてご教授願いたい」と聞いたところ、小村は笑って「だから私は、借りることを知るのみで、返すことは知らない」と答えたそうです。

杉浦は天台道士と号していましたが、「聖言躬行は天台なり」とは、新聞「日本」の記者時代、杉浦から教えを受けた古島一雄の言葉です。聖人の言葉を口で言うだけでなく、自ら実行したということでしょうが、古島は「天台道士は一生、他人の悪口を言わなかった天下唯一人」とも言っています。杉浦の友情には、こんな後日談があります。明治三十五年に東亜同文書院の院長になりましたが、翌年病気で翌年辞職してから七年間というものは病床生活で、万朝報に「故杉浦先生」という記事が出たほど、世間からは忘れられた存在でした。貧乏は底をつき、柱は傾いて屋根も破れています。寝ていても青天井が見えるほどで、杉浦は職人を呼ぶと、新聞紙を三、四枚貼らせて、その上からコールタールを塗らせたというのです。小村はその頃には侯爵になっていましたから、見兼ねた人が「小村さん

に助力を求めたら」と勧めたところ、杉浦はこう言ったそうです。「小村はいやしくも国家の柱石をもって自ら任ずる男である。それに対して我が一家の私事をもって心配をかけてはならぬ。のみならず、かって小村の貧窮時代、自分は彼を補助したことがあるから、その小村に対して無心を言うのは、彼に当時の報償を求めるような感がする。断じていかん」。第一次世界大戦の頃、日本中学の校長をしていましたが、学校の展覧会で生徒が「世界は強者の有なり」。こう書いたのを見て「世界は仁者の有なり」と直させたといいます。日本も日露戦争の後、強者の道ではなく仁者の道をとっていたら、随分変わっていたんではないでしょうか。

薩長閥に縁のない小村は、外務省でしばらく不遇時代が続きます。明治十九年に翻訳局の次長になった時、上司の局長は開成学校同期の鳩山和夫でした。戦後首相になった鳩山一郎のお父さんで、鳩山兄弟の曾祖父ですが、清国代理公使としてやっと外へ出たのは三十八歳の時です。日清戦争の宣戦布告は二十七年八月一日ですが、清国政府は前日、小村に国交断絶を通告してきました。ところが外務省の帰国を命ずる電報が遅れて届きません。小村は引き揚げを決断し、各国公使が「危険だから清国政府に護衛を頼め」と勧めても、「そんなことをすれば、かえって中国人に馬鹿にされるだけだ」と、公使館の旗を下ろすと、館員、在留邦人十五人が一固まりになり、日章旗を先頭に北京を脱出したんだそうです。「死ぬ時は日本の公使として正々堂々と死ぬ積もりだった」と話していますが、訓令を待たない行動は規律違反であり、いかにも小村らしい、大胆ではあるにしても乱暴な話でした。小村が全権に決まった時、海軍大臣の山本権兵衛はこのことを覚えていて、「訓令以外のことは、必ず政府の指示を仰いでほしい」と釘を刺しています。小村は「勿論そうする」と答えましたが、小村の独断専行が講和交渉を壊すことになりはしないか、と山本は心配したのです。

小村自身、藩閥政治が大嫌いだったのに、その小村が外交の表舞台へ出てくるのは、実は、山県有朋、桂太郎の長州閥の引き立てだったのです。清国から帰国後、占領地の民政長官として赴任した小村は、民心を安心させるのが先決だと、食糧や物資の調達は「正当な代価で購入する」と村々に通達しました。しかし、肝心の軍隊が規律を守らないことには何にもなりませんから、各部隊の責任者を集めて「諸君は王者の軍隊として、内外に恥じない行動をとってほしい」と要請したのです。これを聞いて「生意気な役人だ。おれたちは命懸けで戦ってきたのに余計なお世話だ」と怒ったのが、「鬼大佐」の異名をとる佐藤正という部隊長です。早速部下を引き連れ、一升壜を下げて小村の官舎に乗り込んできたのですが、小村は「君たちは酒を飲みに来たのか、喧嘩を売りに来たのか」と平然としています。「両方だ」と聞くと、「それなら酒を先にしろ」と言って、ウイスキーを持ってきて佐藤の茶碗になみなみと注ぎます。それを日本酒なみにガブガブ飲んだものですから、二本目のウイスキーが空いた時には、もうすっかり酔って、そのまま

寝込んでしまいました。

第一軍司令官の山県は、この話を聞いて「それは佐藤が悪い」と佐藤を叱責し、外務大臣に電報を打って小村を勅任官、少将待遇にするよう要請したのですが、階級の点で軍人たちに有無を言わせない配慮でした。これが縁で山県、その下で師団長をしていた桂との付き合いが始まり、二人とも、小村の識見、人物を高く買うようになったのです。小村はこの後、腸チフスにかかって生きた骸骨のようになるのですが、「容貌と引き替えに出世を掴んだ」――こう言われたように、外務次官、アメリカ公使、ロシア公使と、遅蒔きながら出世街道を走り始めます。そして首相になった桂によって外務大臣に抜擢されたのは、明治三十四年、小村四十六歳の時でした。

小村外交の特徴は、細心にして用意周到、しかも大胆なことでした。奉天の戦いの後、長岡外史参謀次長が盛んに樺太占領を主張した時、陸軍の首脳が「兵力分散になる」と反対した中で、小村だけが賛成しています。樺太を占領しておけば、講和交渉を有利に進められるというのです。樺太作戦が最終的に裁可された時には、講和会議の開催が決まっていました。これから和平の話し合いをしようというのに、新たな軍事行動が講和会議を壊すことにならないか。誰もが心配しました、が小村はすぐ高平公使にルーズベルトの意向を確かめさせたのです。ルーズベルトの返事は「ロシアの講和会議受諾は休戦を条件にしたものではない。現在でもロシア軍は増強を続けており、たとえロシアが抗議してきても突っぱねる」。しかも「樺太占領は、日本の講和条件を有利にするだろう」と付け加えたのです。こうしてルーズベルトのお墨付きを得て、日本軍は七月七日、小村がアメリカへ出発する前日ですが、樺太南部に上陸し、月末までに樺太全島を占領しました。結果的には、これがポーツマスでの切札になったのですから、小村の見通しの確かさでした。

小村に与えられた政府訓令は、「絶対的必要条件」さえ通れば、講和を結べということでした。韓国を日本の自由処分に委せる、日露両軍の満州撤兵、遼東半島租借権とハルビン―旅順間の鉄道譲渡、この三項目ですが、小村自身は努力目標とされた賠償金、樺太を取ることが、愛する日本に尽くす道だと考えていたのです。ニューヨークへ着くと、ルーズベルトとの連絡役に当たる金子堅太郎に決意を話しています。「あくまで講和を纏めろと内命を受けている。だが私は、樺太と償金はどうしても貫く積もりだ」。

その小村にとって、ロシア全権が講和成立に強い意思を持つウイッテだったことは、幸いだったと言えるでしょう。ウイッテは奉天の戦いの直後、皇帝に講和を勧める意見書を出していましたし、ここで戦争を止めなければ混乱したロシア再生の道はない、と思っていたのです。しかし、ウイッテは海千山千、したたかなベテラン政治家でした。長年大蔵大臣を務めてシベリア鉄道建設を推進し、日

清戦争で日本のものになった遼東半島を、「むざむざ日本に渡すことはない」ど、三国干渉で清国に返させた仕掛人はウイッテなのです。そしてドイツの艦隊が山東半島の膠州湾を占領した時、ロシアは「ドイツから守ってやる」という口実で艦隊を旅順に送り、そのまま占領してしまいましたが、清国の厳重抗議に、李鴻章に賄賂を贈って旅順をロシアのものにしたしまったのもウイッテでした。

ウイッテも、講和交渉の争点は「金と土地だ」と思っていました。しかし全権任命に当たって、皇帝から「一ルーブルの金も、一握りの土地も渡してはならぬ」と厳命を受けています。ウイッテは考えました。この点でロシアは譲れないのだから、会議で真っ向からやり合っても意味はない。搦め手から攻めるしかないが、ウイッテはその突破口をアメリカ市民に見つけたのです。アメリカが日本に同情するのは、日本が負け犬になるだろう、可哀相だと思ったからだ。それが今や小さな野良犬が、白い大きな洋犬を噛み殺そうとしている。白色人種なら、誰でも野良犬を憎らしいと思うだろうし、またそう思わせる必要がある。それには、アメリカで大きな影響力を持つ新聞を味方につけることだ。だから、新聞記者には極力愛想よく応対し、市民にも決して横柄な態度をとらず、親しみを持たせる。講和会議もロシアが望んだものではないし、極東の片隅で行なわれている戦争は大国ロシアにとっては痛くも痒くもない、といった顔をする。アメリカ世論を味方につけ、アメリカと国際世論を動かすこと、これがアメリカに乗り込むウイッテの作戦だったのです。

ウイッテのマスコミ操縦策は、まず会議の取材記者を大勢同行することから始まりました。ヨーロッパの有名な記者、カメラマンをロシア全権団の船に無料で乗せたのですが、中でも国際的なジャーナリストとして知られるイギリスのデイリー・テレグラフのロシア特派員ディロン、ロンドン・タイムズの前政治部長ワレース、フランス人記者マタン、この三人はウイッテが秘かにマスコミ担当にした秘密顧問だったのです。朝日新聞はそんなこととは知らずに、大阪毎日のオラフリンに対抗するため、ディロンを嘱託通信員にしたのですから話になりません。当然、その報道はロシア側の主張に偏ったものになり、朝日の社論が講和に強硬論を展開する一因ともなります。

ニューヨークの港には、大勢の新聞記者が待ち構えていました。ウイッテが船からローゼン駐米大使に電報を打って、記者を集めておくよう手配しておいたのです。ウイッテは気軽にインタビューに応じ、一人一人と握手してシャンペーンを振る舞いました。ホテルの出入り、汽車や自動車の乗り降りの際にも、必ずボーイや運転手、車掌たちにわざわざ近寄り、肩を叩いて握手を求めます。アメリカの新聞には連日のように、行く先々で市民とにこやかに握手するウイッテの写真が大きく載りました。

それはまた、頑なに沈黙を守り続ける小村とは余りにも対照的だったのです。

大体が小村は、新聞記者嫌いで秘密主義でした。四年間の外相時代、記者会見を開いたのはたった一回だったといいます。ロンドン・タイムズの記者が会見を求めても、簡単な声明を読み上げさせただけ、小村は姿を見せません。記者が苦情を言うと、「我々はポーツマスへ新聞の種を作りに来たのではない。外交交渉をしに来たのだ」と言って、余計怒らせました。アメリカに留学し、アメリカ公使をした小村が、アメリカという舞台には大勢の観客がいる、その観客を動かすのは新聞だという、大きなポイントを見落としていたのです。

腰の低い、善良なロシア人を演じ続けたウイッテも、八月十日から始まった講和会議では、打って変わったように傲岸尊大でした。小村が「貴方はまるで、勝者のような口調でものを言う」と言うと、ウイッテはすかさず「ここには勝者はいない。だから敗者もいない」と切り返します。ウイッテは終始、弱みを見せまいとしましたが、感情的になることが多く、ひっきりなしに煙草を吸っては、せわしなく足を組み替え、早口になったといいます。一方の小村は、言葉を一つ一つ区切って明確に話し、論理的で冷静そのものでした。それでも不機嫌な時には、煙草を灰皿に強く叩きつけて灰を落としたそうです。

会議はこんな雰囲気で進みましたが、ウイッテの場外作戦が着々とポイントを稼いでいきました。会議内容の新聞発表は、両国が相談して発表文を作成し、それ以外は秘密厳守となっていたのに、発表以外のことがどんどん新聞に出てしまうのです。小村は会議初日、初めて日本側の条件十二か条を提示したのですが、新聞発表は「日本全権委員が講和条件を書面で交付した。ロシア全権委員は直ちにその研究に取り組み、なるべく早く回答することになった」――こんな味もそっけもないもので、各国記者が一番知りたがっている条件の内容には、全く触れていません。ところが翌日の朝刊各紙の一面トップには、十二か条がデカデカと載っているのです。ウイッテが、日本の条件を広く世論に訴えれば、それがロシアに対する同情を呼び起こすだろうと、ＡＰ通信の記者に洩らしたものでした。小村の抗議にも、ウイッテはどこ吹く風です。日本全権団は、その遣る瀬ない気持ちを外務省に「かえって、日本の要求が穏和なものであることを知るだろうから、結果は我に不利でないと認める」と打電していますが、後の祭りでした。

ポーツマスには世界各国から百二十三人の特派員が来ていましたが、人気があるのは、当然のことながら「書いて貰っては困るが…」と言いながら、何でも喋ってくれるロシア全権団です。大阪朝日など六人の日本人記者は、ロシア側へ聞きに行くわけにもいかず歯軋りしたといいます。日本全権団が秘密主義をとるため満足な取材もできないとなれば、各国の記者は自然とロシア全権団に接近し取材を競うようになります。ですから会議の進捗状況も、ほとんどがロシア側の洩らす情報によって伝えられるようになり、そのことがまたロシア側に有利な世論を作り出していったのです。

会議の衝突は、樺太問題から始まりました。小村が「間宮海峡は間宮林蔵が発見し、しかも樺太は現に日本軍が占領している」と樺太割譲を迫れば、ウイッテは「領土の割譲は降伏した場合だ。ロシアはまだ降伏していない」と譲りません。ウイッテが「これ以上続けても意味がない」と決裂を匂わせれば、小村は「樺太問題の討議を一時中止して他の条件に移ろう」と提案し、会議が始まって一週間、日本側が「絶対的条件」とした三項目は、東清鉄道の譲渡区間をハルビンからではなく長春から南としたくらいで、大体通りました。

これで、小村の肩にかかっていた最低の使命は果たせたわけすが、小村の耳には日増しに強くなる「領土を取れ、賠償金を取れ」の日本国内の声が耳に入ってきます。しかもウイッテは、事あるごとに「譲歩したのはロシアだけだ」と語り、ザ・ワールドという新聞には、こんな漫画が載りました。大男のウイッテが、はるかに小さい小村に自分が身につけている物を次々と渡しています。韓国というネクタイ、満州というワイシャツを手にした小村が、今度は「樺太の帽子も寄越せ」と、もう一方の手を差し出しているのです。漫画は端的で分かりやすいし、訴える効果も大きいんですね。アメリカ世論の風向きは、明らかに変わりつつありました。

ウイッテも、樺太で譲る以外に妥結の道はないと思っていました。十八日の会議を両国全権二人ずつに通訳を交えた六人だけの秘密会とすると、「あくまで個人の考え」と断った上で、樺太を南北に分ける二分案を出してきたのです。小村にとっては一歩前進でしたが、「占領している北半分を返すには、それ相応の代償が必要だ」と、十二億円の金額を提示します。これを聞いたルーズベルトは内心高いと思ったようですが、それでもロシア皇帝に重ねて電報を打ち講和を勧めました。しかし皇帝の強硬態度は変わらず、ついに談判打ち切りを指示してきたのです。瀬戸際に追い詰められたウイッテは、「このまま打ち切ればアメリカ大統領の感情を損ねます。努力したことを印象づけるためにも…」と、皇帝から最後の会議を開く許可を得ると、二十三日のその会議でワナを仕掛けたのです。

「もし樺太全島を譲った場合、日本は金銭の要求を撤回する意思ははないか」

— 伊藤博文だったら「金が日本の目的ではない」と即座に応じていたでしょう。

小村は判断が早く、しかも的確なことで知られた人ですが、「あと一押し」と思ったのかも知れません。「日本では賠償金要求を放棄するのは、樺太全島を放棄するのと同様に困難なことだ」と、答えてしまったのです。ウイッテの「領土割譲」という仮定の質問に対して、小村が否定的な回答をしたことで、日本を「賠償金のためには戦争継続も辞さないんだ」という立場に追い込んでしまいました。ウイッテは「これで袂を分かつのは心残りだ」と二十六日の会議を提案すると、記者団にこのやり取りをばらしたのです。「私にはよく分かった。日本は金ほしさに戦争を続けようとしているのだ」。ウイッテの発言は新聞に大きく載りました。

実は、ルーズベルトは前日の二十二日の夜遅く、ニューヨークの金子に「親展」の手紙を届け、「単に多額の償金を得んがために戦争を継続するは、文明及び人道の許ざる所なりと存じ候」。こんな厳しい言葉を使って、賠償金のために戦争を続けないよう忠告していたのです。これまで賠償金要求に、一定の理解を示していたルーズベルトの大きな心変わりでした。大統領に再選されたばかりのルーズベルトは、この講和を纏めることでさらに国民の支持を固めようとしていました。ところが「日本は金ほしさに戦争を続けようとしている」との非難が強くなってくれば、そうした世論を無視できなくなって来たのです。金子のミスは、深夜だったこともあって、ポーツマスの小村にすぐ知らせなかったことです。二十三日午前、小村がウイッテとの会談に出かけた後に打電したのですが、小村が賠償要求にルーズベルトの支持がなくなったことを知っていれば、当然出方も変わっていたでしょう。外交交渉を後押ししてくれるのは、何といっても友好世論なんですから、アメリカ国民に「金ほしさ」の汚い印象を与えてしまったことは、小村の取り返しのつかない大きな失点でした。

三日ぶりに開かれた二十六日の会議では、ウイッテは九月五日発のドイツ客船を予約し、「交渉を打ち切って引き揚げるぞ」といった脅しをちらつかせながら臨んできました。主張は平行線でしたが、二十八日に再度会議を開くことで合意すると、小村は「会議決裂ノ危機ニ至リタル状況」を打電、政府の最終決断を仰いだのです。小村自身は、この段階で交渉決裂を覚悟したのでしょう。「樺太、賠償金の譲歩は、日本がロシアに屈伏したことを意味する。この上は断然戦争継続を決意し、第二の時期を待って講和会議を再開するしかない」。こんな激しい意見電報を打っていますが、事態はここから急転したのです。

日本政府の最終態度を決める閣議は、元老も出席して二十八日午前八時から開かれました。日本とポーツマスの間には十四時間の時差があります。暗号電報ですから、翻訳などに正確を期すには、さらに五、六時間の余裕を見なければなりません。桂首相は「慎重審議の時間がほしい」と、二十八日の会議を二十九日に延ばすよう小村に指示していましたが、紛糾した閣議の方向を決定づけたのは、山県参謀総長の満州視察報告だったのです。明治天皇は戦争の前途を心配され、小村の訪米直後に山県を満州に派遣し、満州軍の現況、各軍司令官の意見、将兵の士気を調査させていました。その報告は、ロシア軍はヨーロッパから新鋭部隊を続々と送り込んでいて、日本軍の三倍になっていること。このまま戦争を継続すれば、軍事費は十七、八億円にもなり、それが調達できなければ弾薬も食糧も底をつき、全軍が満州の原野に立往生するだろう。閣僚の間からは「戦闘に勝って戦争に負けるということか」と悲痛な声も出ましたが、閣議は全員一致で全面譲歩を決めたのです。桂首相は天皇の裁可を得ると、午後八時三十七分、小村に政府訓令を打電させました。「樺太、償金ノ二条件ヲ放棄シ、コノ際講和成立セシ

ムルコトニ議決セリ」。そしてロシアの出方を見るため、「まず償金要求だけを撤回し、土地割譲の要求は続行することにせよ」とも指示していました。

外務省通商局長の石井菊次郎が、「こんな忙しい時に呼び出してきて」とぶつくさ言いながら、イギリス大使マクドナルドの所へ人力車で出掛けて行ったのは、その一時間後のことです。石井は明治三十三年の義和団事件の時、清国公使館の一等書記官をしていて、当時清国公使だったマクドナルドとは北京籠城戦を一緒に戦った仲です。日本兵の見事な活躍にすっかり日本贔屓になったマクドナルドは、その後日本大使になると、本国政府に日英同盟の必要性を説いて回ったほどでした。その石井がものの四十分もしないうちにあたふた戻ってくると、「樺太の南半分は助かるぞ！」と叫びます。マクドナルドは、石井に本国政府の緊急電報を見せたのです。ロシア皇帝がメイヤー・アメリカ大使に「償金の支払い要求は断じて受け入れぬが、樺太はロシアが領有して三十年ほどだ。南半分を日本に譲る気持ちがないでもない」。こう語ったのをイギリス大使が聞いて本国に打電、イギリス外務省がマクドナルドに急報してきたものでした。まさに日英同盟万々歳ですが、時間がありません。電信課主任の幣原喜重郎、戦後首相になる幣原は外務次官珍田捨巳の了解をとると、独断で電文を作成、「先刻電報済ノ政府訓令ハ、暫ラク執行ヲ見合ハセ、後電、後ノ電報ヲ待タレタイ」と至急電を打ったのです。

桂首相は、報告を受けて考えました。ルーズベルトは当然、メイヤー大使の報告で「樺太南半分譲渡に皇帝が同意したこと」を知っているはずなのに、なぜ小村や金子に伝えずに口を噤んでいるのか。桂の判断はこうでした。談判決裂で両国全権団がニューヨークへ引き揚げてきたら、樺太を南北に分ける二分する案を出して、一気に講和成立に持ち込もうとしているのではないか。そうなればルーズベルトは称賛に包まれ、大統領としてゆるぎない地位を得られます。そう思った桂は、ルーズベルトに確認を求めることを止め、「日本政府独自の立場で償金、樺太北半分放棄」を会議に提出するよう、最終訓令を出したのです。

ポーツマスの小村が全面譲歩の最初の電報を受け取ったのは、二十八日午後一時過ぎでした。随員の間からは啜り泣きが洩れ、声をあげて泣きだす者もいたそうです。そして修正訓令が届いたのは、日付が二十九日に変わった午前零時過ぎです。小村は、東京は何か確実な新しい情報を掴んだに違いないと思いながら、午前十時からの最終会談に臨んだのです。

あれほど強硬だったロシア皇帝が態度を変えたのは、国内にストが続き、オデッサ軍港での戦艦ポヨムキンの反乱事件など、不穏な動きが広がってきたためでした。それまで戦争をけしかけていたドイツ皇帝も、盛んに講和を勧めてきますし、フランスの金融資本も「戦争継続の公債には応じない」と通告してきたのです。ウイッテは「樺太南半分割譲」の皇帝命令は受け取ったものの、強硬な小村の

態度から、償金なしでは妥結の望みは少ないと思っていました。ですから内ポケットには、「会議決裂」を伝える至急電の電文を入れておいたのです。小村が償金要求にこだわれば、隣室の随員に「ロシア煙草を持ってきてくれ」と言ってその電文を渡します。ロシア煙草は「打電せよ」の合図で、電文は満州の全ロシア軍に対する即時進撃命令を意味していました。

ウイッテが「勅命により最後回答をする」と言って、小村に提出した文書には「樺太北部を金銭上の報奨なくロシア領とすることを条件に、樺太南部を日本に譲渡することに同意する」とありました。小村はさぞホッとしたことでしょう。ウイッテが固唾を飲む中、五分ほど熟読してから「日本政府は平和の克復を切望し、講和談判を円満に終了する趣旨を以て同意を表する」と回答したのです。半ば拒否を予想していたウイッテは、「瞬間思わず呆然とし、やがて頬が紅潮するのを感じた」と回想しています。会議室を出ると、別室の随員に「諸君、平和だ！日本は全部譲歩した」と叫んだのです。ルーズベルトも交渉成立を聞いて「大出来！これほど嬉しいことは近年にない」と言ったそうです。

講和条約調印の九月五日、東京は騒乱状態になりました。「屈辱講和反対」の国民大会が日比谷公園で開かれ、暴徒と化した群衆が内務大臣官邸、国民新聞社などを襲い、東京市内の交番の八割、三百六十四か所を破壊、焼失しました。そして「ルーズベルトがこんな講和を押しつけたのだ」、群衆の見当違いの恨みがキリスト教会に向けられ、十三か所が焼き払われ、それがまたアメリカの国民感情を悪くしたのです。体調を崩してアメリカで療養していた小村が帰国したのは十月十六日ですが、横浜港には約束通り元老の伊藤が出迎えていました。新橋駅や沿道では、万一に備えて銃剣をつけた兵隊が警戒に当たりましたが、小村の両脇には、暴漢が現われたら「その盾になる」といわんばかりに、桂首相と山本海軍大臣がピッタリ寄り添っていたそうです。

ウイッテは、各国記者団に「我々は外交的大勝利を博した」と豪語しましたが、一度は樺太放棄まで考えた日本とすれば、小村の粘り勝ちだったと言えるかも知れません。そして伊藤が全権だったとしても、結果は同じようなものだったでしょう。それでいてなお、私が伊藤だったらと思うのは、アメリカ世論が違っていたろうということです。アメリカ人は日本の奉天勝利に驚き、日本海海戦に日本人同様に歓喜しました。日本人と見れば、我がちにと握手を求めてきたのです。伊藤が全権だったら、そうした親日感情をもっとしっかり、将来につなげていたでしょう。

小村はポーツマスを引き揚げる時、世話になった感謝の印としてニューハンプシャー州に一万ドルの寄付をしました。三日後に知ったウイッテも慌てて同額の寄付をしましたが、実は小村の寄付は今も生き続けているのです。ニューハンプシャー州は「露日基金」と名付けて日露両国の国債を買い、その利息を慈善事業に

充ててきましたが、ロシアの利息はロシア革命で来なくなりました。日本も太平洋戦争で一時中断しましたが、昭和二十六年、溜まっていた九年分の利息を倍にして送金を再開したのです。名称も「日本慈善基金」と改められましたが、ただ私が残念に思うのは、こうした感謝がもう少し広い視野で日米関係に向けられていたら、ということです。

小村は二年ほど後のことですが、財界大御所の渋沢栄一に民間外交の重要性を訴えて、こう話しています。「これからの外交は、大臣や政府の役人によるだけではなく、事業家や民間人による国民外交が行なわれるのでなければ、円満な国交は望まれない」。この言葉には、ポーツマスで世論の変化とその影響力を目の当りに体験して、外交交渉には世論の支持、そして世論を正しく育てることが大切だ、という小村の痛切な反省がこめられているように思います。

しかし日本は、「満州開放」を約束して米英の支持を取り付け、戦争に入ったのに、その約束を守らず、米英との対立路線を歩むようになります。まだ講和会議が始まる前、満州軍は七月一日から外国人はシャットアウトして、日本人だけに満州での居住・営業を営業を許可したのです。満州軍高級参謀の井口省吾少将はこう訓示しています。「戦後満州における収利の基礎を固め、将来における我が文明扶植のために地歩を作るためだ」。米英が入ってくる前に日本の足場を固めてしまおうというのですが、目先の満州の権益に目を奪われ、国際道義を忘れてしまったのです。満州はロシアに代わって日本の独占市場となっていきますが、「満州開放」を国民外交の土台にしていたら、その後の日米関係は随分変わっていたろうと思います。